



集約放牧のポイント

はじめに

北海道は、昨年4月に「食の安全・安心条例」を施行しました。一方、酪農では06年産の生乳減産を打ち出すなど大きな転換期を迎えています。自給飼料を活用した資源循環型酪農・畜産の確立には、良質な自給飼料の効率的生産が不可欠で、TMRセンターの活用や集約的放牧利用の拡大が望まれます。今回は、「集約放牧のポイント」について、草地の利用面から紹介します。

集約放牧とは何ですか！

天北農試は、集約放牧を「適度な輪換によって乳牛に短草・高栄養な放牧草を採食させ、その依存度合い(放牧依存率)を高め、併せて草地の単位面積当たり及び家畜1頭当たりの生産(産乳等)を最大限に引き出そうとする技術」と考えました。

すなわち、昼夜放牧だけでなく、各自の草地基盤で可能な範囲の放牧利用(日中・時間制限放牧)と高品質な自給貯蔵飼料を組み合わせると高い生産性を目指すものです。

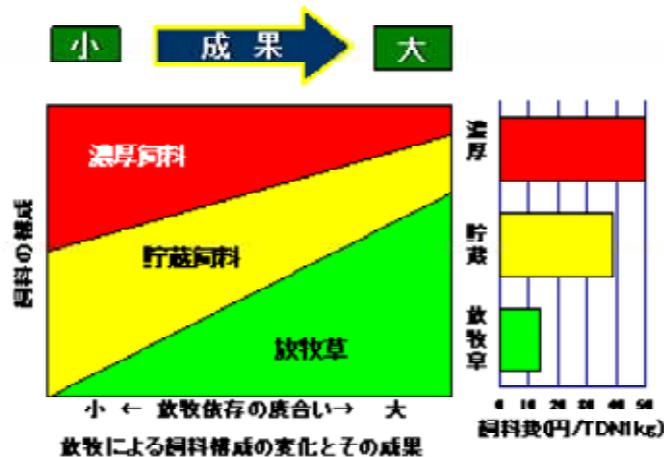


図1 集約放牧が目指すこと

効率的な生産・利用法を考える！

生産を最大限に引き出す集約放牧は、色々な技術を組み合わせる総合技術と言えます。

放牧馴致が大切

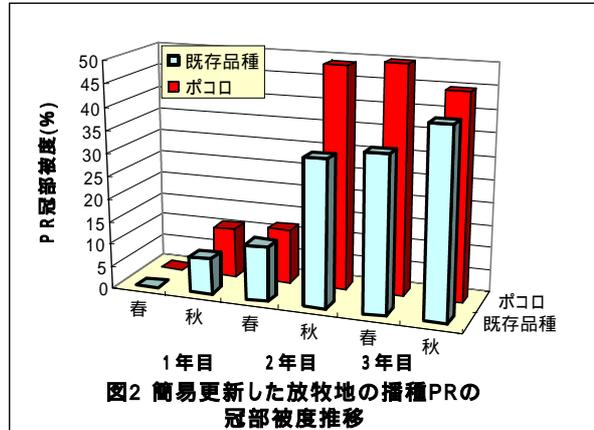
馴致は、舎飼いから放牧への移行期(その逆も同じ)に乳牛を新しい環境(気象、放牧草など)に馴らし、環境の急変による採食量や乳量の低下を防ぎ飼養形態のスムーズな変換を達成することです。10日前後の馴致は、放牧移行時の乳量低下を防ぐ効果のあることが良く知られています。

もう1つは、早春の草丈が短い時(ペレアルライグラス10cm, オチャートグラス, 苜蓿10~15cm)から放牧を開始し、採食量が徐々に増加する一方で、牧草のスプリングフラッシュを抑制する効果も見逃せません。

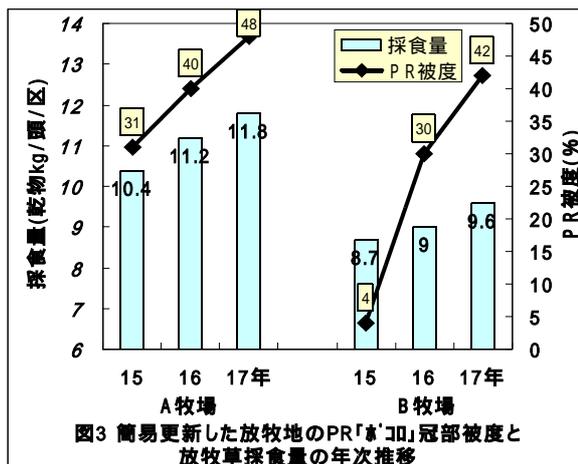
簡易更新で放牧草の採食量を増加させる

採食量を増加させるには、ペレニアルライグラス(PR)などし好性と栄養価の高い放牧草を準備することが大切です。

新品種「ポコロ」を用いた作溝型播種機による簡易更新は、2年目秋には放牧地の草地植生を改善できます。



既存放牧地でペレニアルライグラス「ポコロ」の割合が多くなると、放牧草の採食量が増加します。このことは、単位面積当たりの産乳量が増加することと同じです。



無駄の無い放牧地面積と配置

放牧草は、季節により生育の早さが異なります。上手く輪換放牧を行うには、放牧する乳牛に見合った草地面積の確保と兼用地の利用が大切です。

道北の例では、植生や生産力の比較的良好な放牧地(PR主体、乾物生産量630kg/10a)の場合、1頭当たりの必要面積は兼用地面積を専用地の1/2に補正して昼夜放牧0.45~0.33ha、日中放牧0.42~0.30ha、制限(3時間)放牧0.34~0.22haが目安です。広すぎると無駄になり、狭すぎると採食量が不足します。一方、放牧地の専用地と兼用地の比率は、特に春の牧草生育に左右されますが、専用：兼用 = 50~55：50~45が目安です。

今回は、放牧地管理の面から「集約放牧のポイント」を紹介しました。放牧することによる家畜側の変化は、放牧草の採食量が増加すると乳中尿素窒素(MUN)が変わりやすく、その場合繁殖に悪影響が出る、放牧地のレイアウトや水槽の設置場所・個数の違いにより採食行動に差が出る、馴致は、放牧から舎飼いへの移行期も大切です。放牧に馴らす面では子牛の早期放牧も同じです。

放牧は総合技術です。家畜生産を最大限に引き出すには、家畜の望む放牧地に改良し、放牧に適した家畜に育てることが必要です。

【問い合わせ：技術普及部 石田 亨】